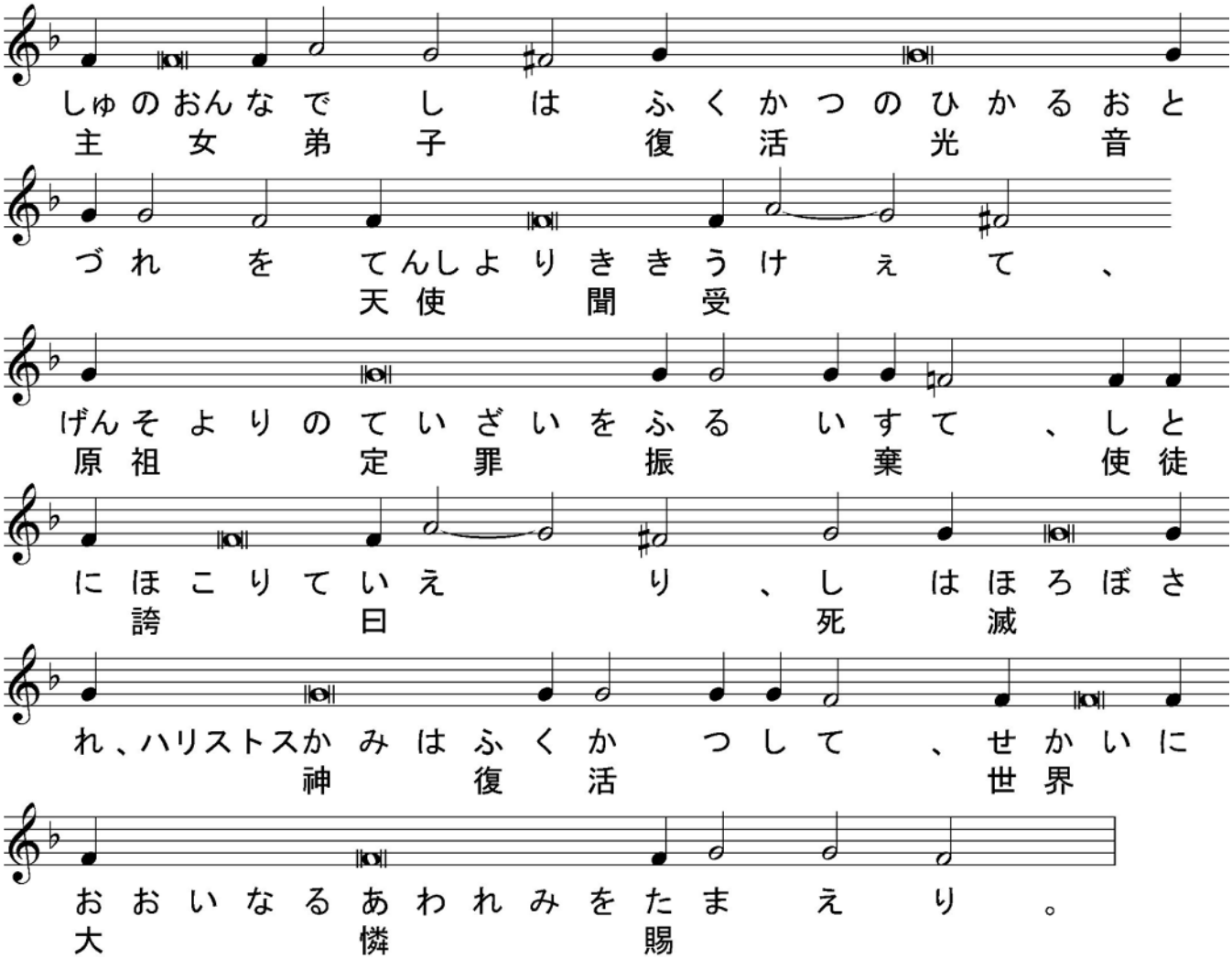
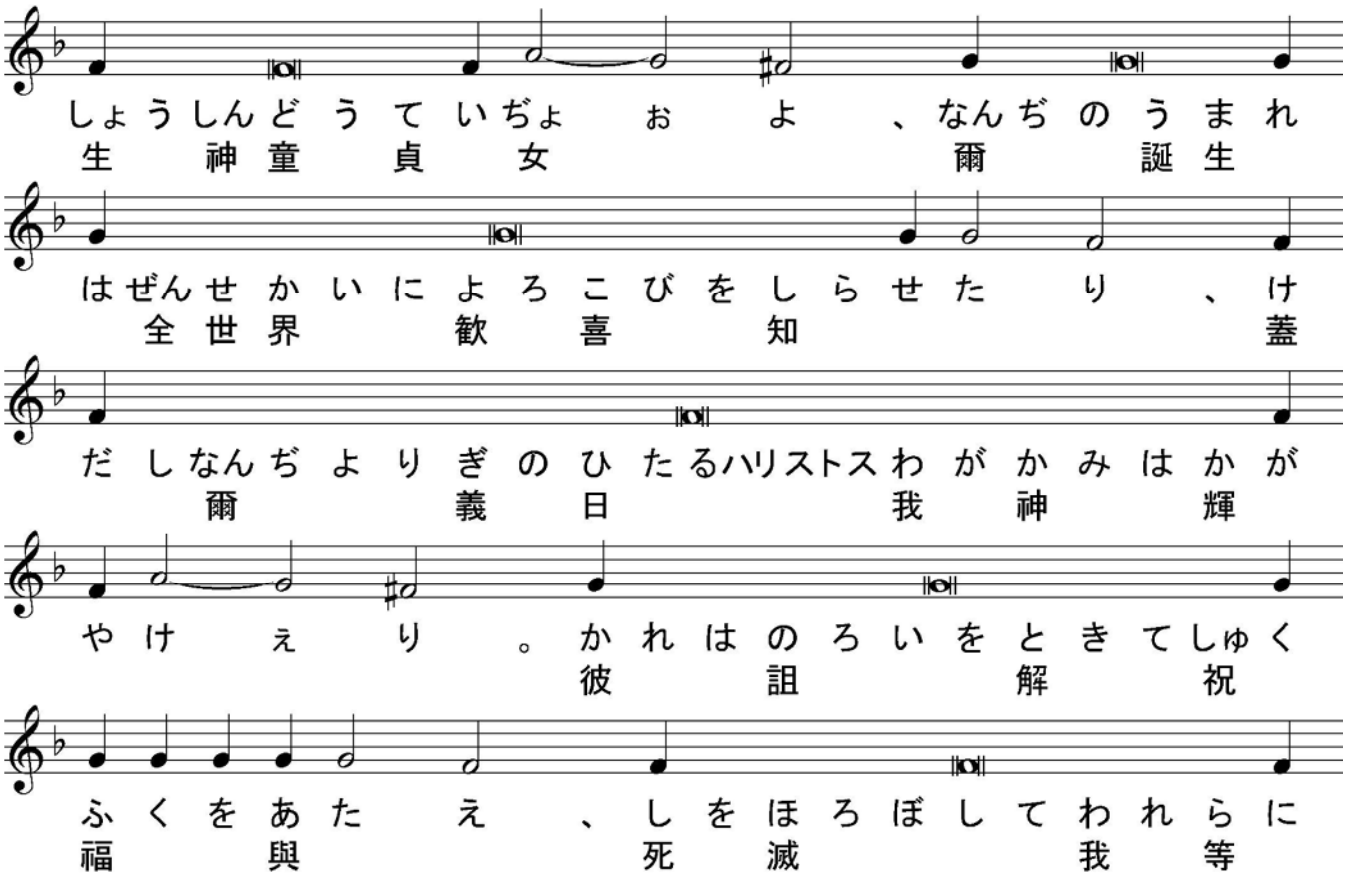
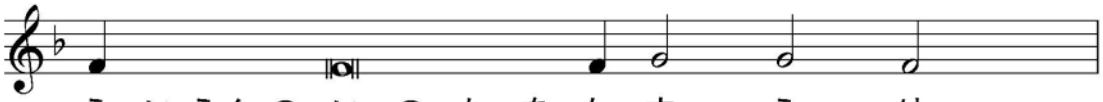
【　復活のトロパリ　第４調　】



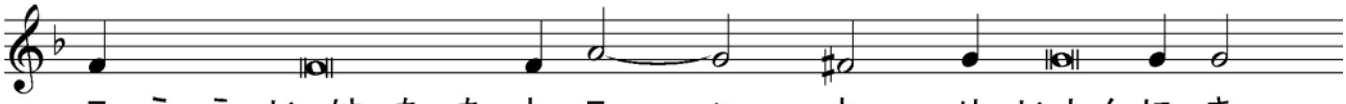
【　生神女誕生祭のトロパリ　第４調　】



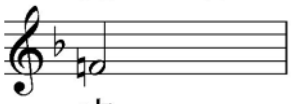


え いえんの いの ち を た ま え り 。
永 遠 生 命 賜

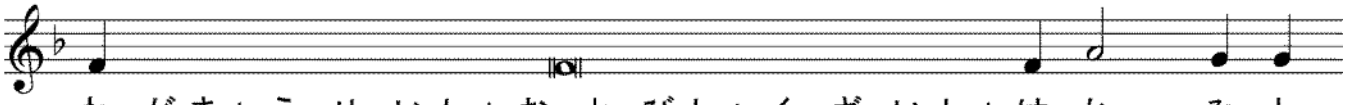
【 復活のコンダク 第４調 】



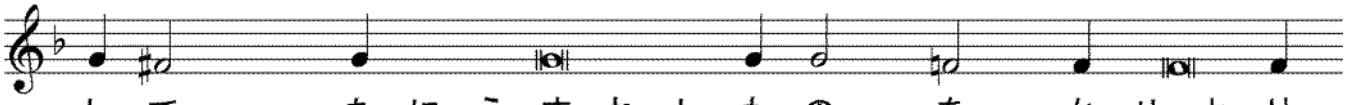
こ う え い は ち ち と こ ぉ と せ いしんに き
光 榮 父 子 聖 神 歸



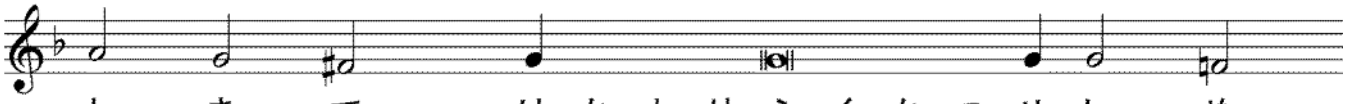
す 、



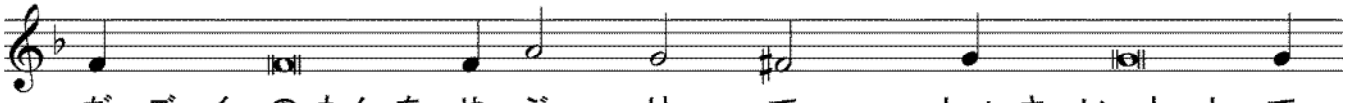
わ がきゅう せ いしゅお よ びしょく ざ いしゅは か み と
我 救 世 主 及 贖 罪 主 神



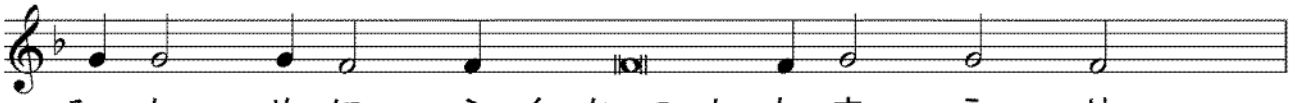
し て 、 ち に う ま れ し も の を か せ よ り
地 生 者 桎 梏



と き て 、 は か よ り ふ く か つ せ し め 、
釋 墓 復 活

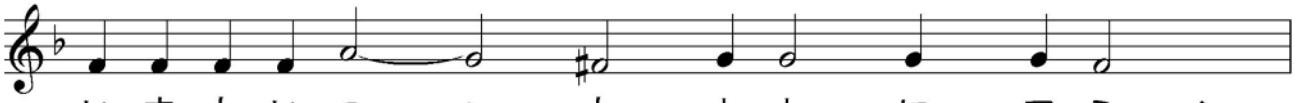


ぢ ご く のもんを や ぶ り て 、しゅ さ い と し て
地 獄 門 破 主 宰

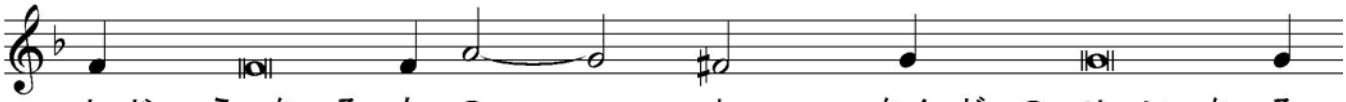


みっか め に ふ く か つ し た ま え り 。
三 日 目 復 活 給

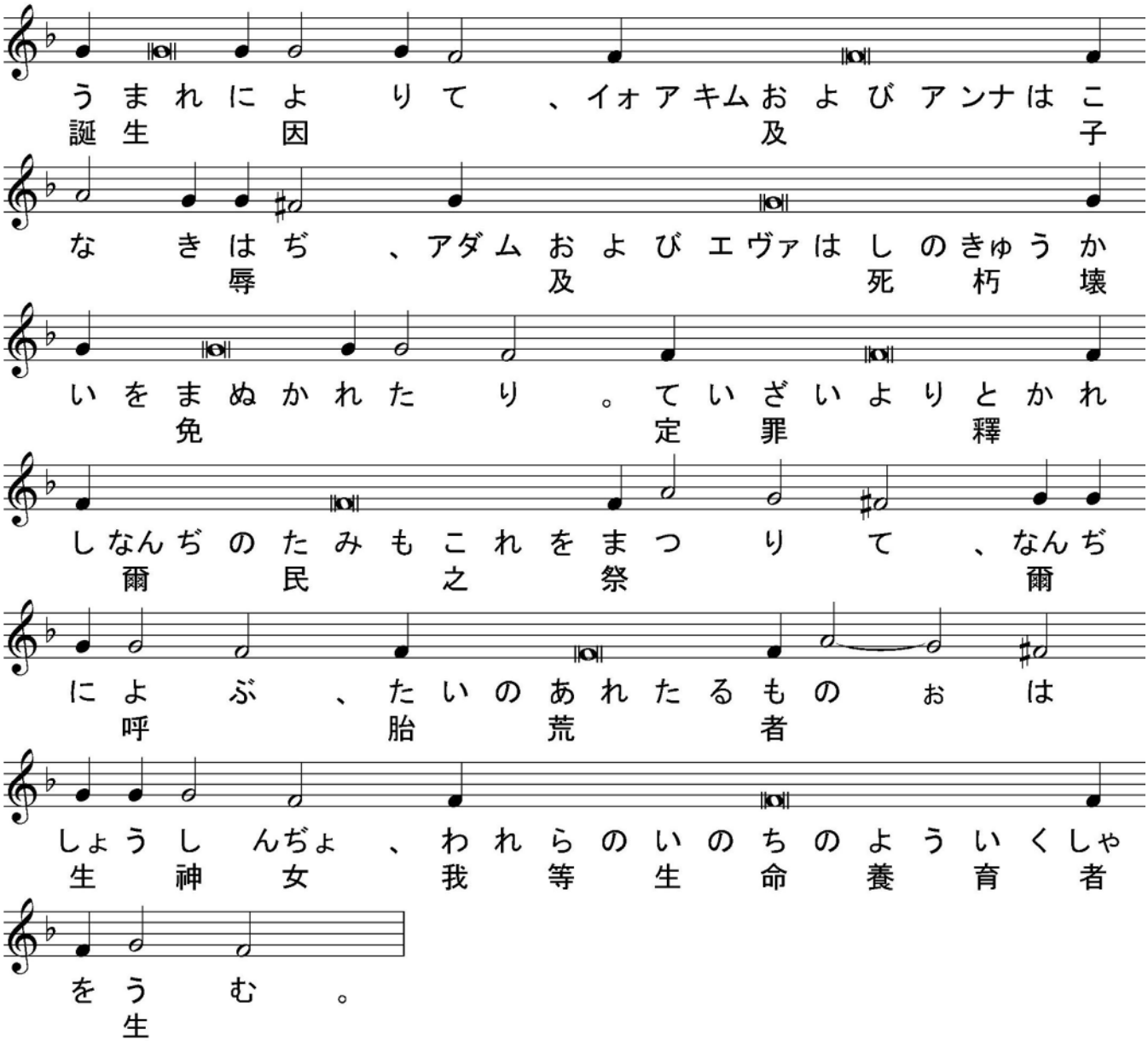
【 生神女誕生祭のコンダク 第４調 】



い ま も い つ ぅ も よ よ に 、 ア ミ ン。
今 何 時 世 世



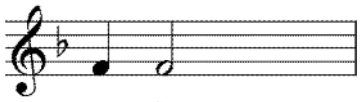
し じょう な る も の ぉ よ 、なんぢ の せ い な る
至 淨 者 爾 聖



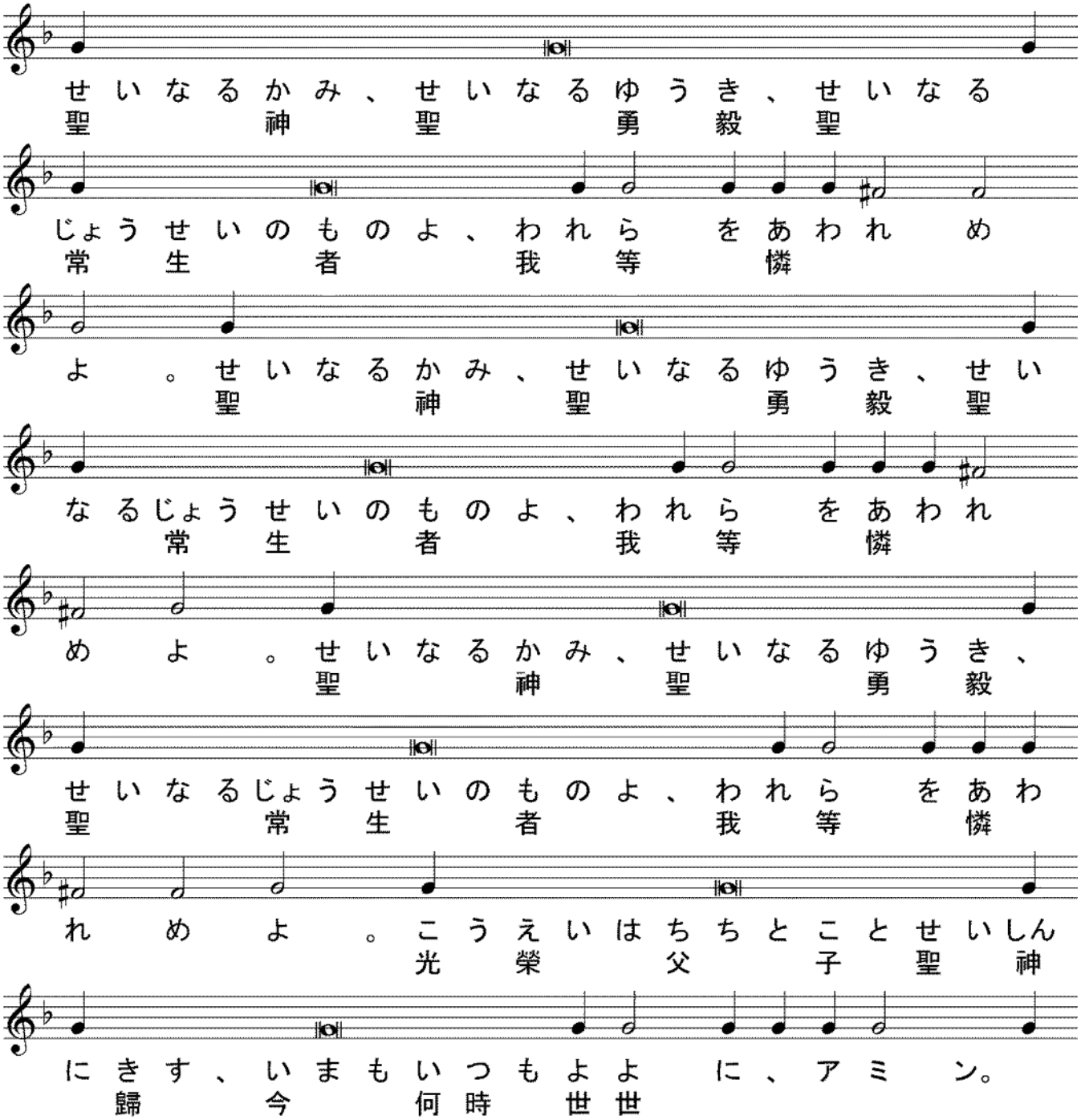
司祭）（ 黙誦：聖なる神、聖者の中に息い、セラフィムより聖三の聲を以て歌頌せられ、ヘルヴィムより讃榮せられ、悉くの天軍より伏拜せられ、萬物を無より有となし、人を爾の像と肖とに依りて造り、爾が諸の賜を以て之を飾り、願う者に智慧と明悟とを與え、罪を行う者を棄てずして、其救の爲に痛悔を立て、我等卑しくして不當なる爾の諸僕を、此の時に於ても、爾が聖なる祭壇の光榮の前に立ちて、爾に當然の伏拜讃榮を奉るに堪うる者となしし主宰よ、爾親ら我等罪人の口よりも聖三の歌を受け、爾の仁慈を以て我等に臨み、我等に凡そ自由と自由ならざる罪を赦し、我が靈と體とを聖にし、我等に生涯善功を以て爾に務むるを得せしめ給え、聖なる生

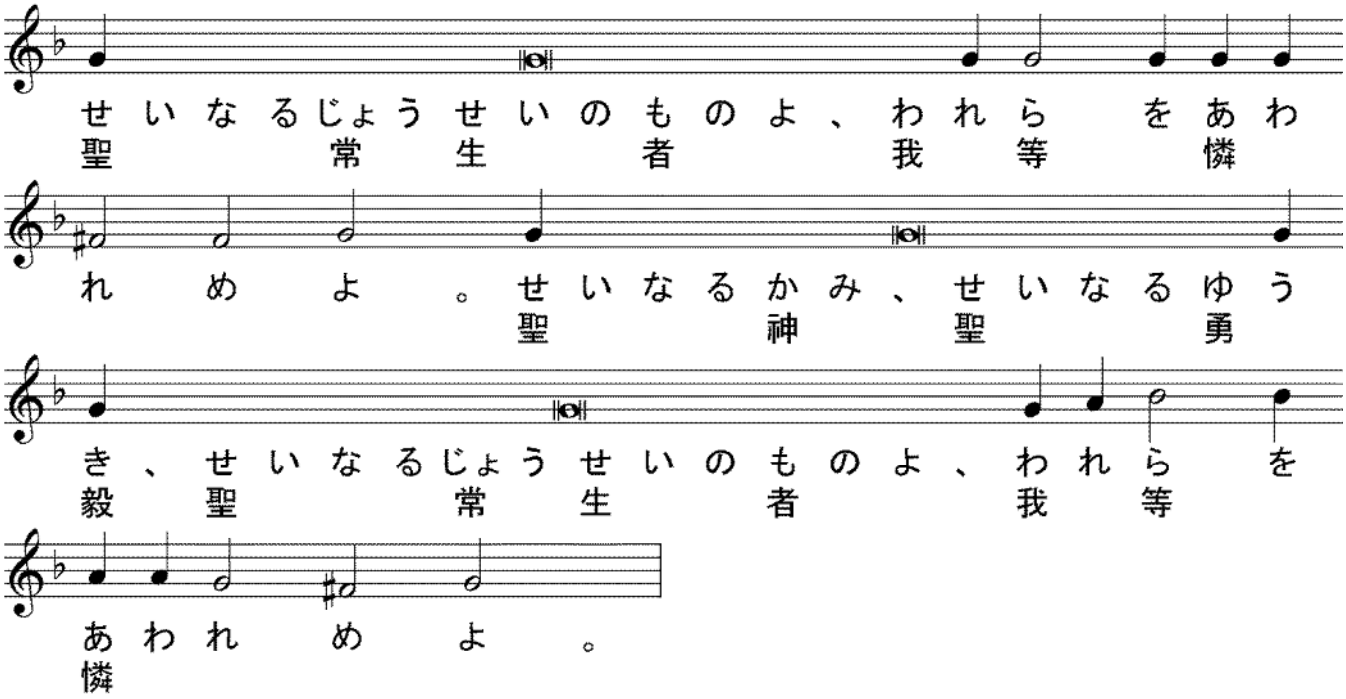
神女と古世より爾の喜を爲しし諸聖人との祈禱に依りてなり、）

司祭）蓋我が神よ、爾は聖なり、我等光榮を爾父と子と聖神に献ず、今も何時も世世に、



【 聖三祝文 】





司祭）（ 黙誦：主の名に依りて來たる者は崇め讃めらる、ヘルヴィムに座する者よ、爾は其國の光榮の寶座に在りて恒に崇め讃めらる、今も何時も世世に、 ）

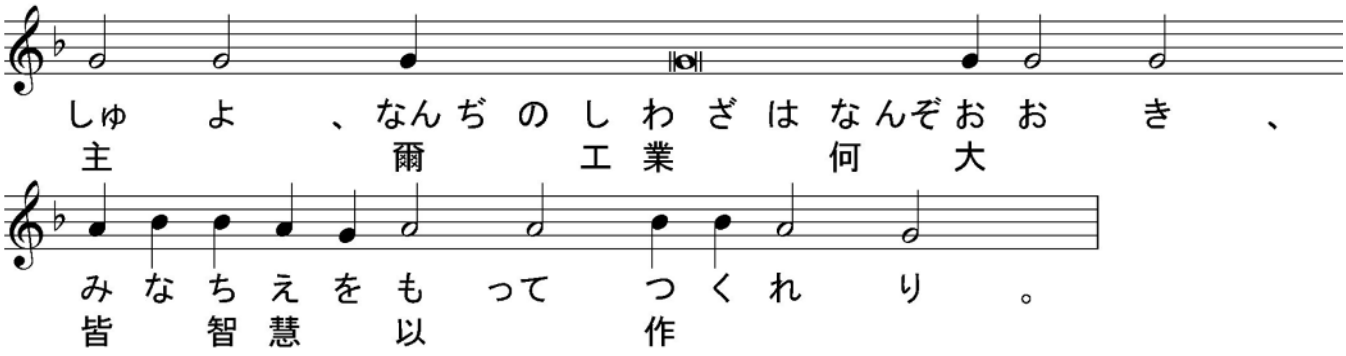
【 提綱 主日第４調 及び生神女の歌 第３調 】

司祭） 愼みて聽くべし、衆人に平安、

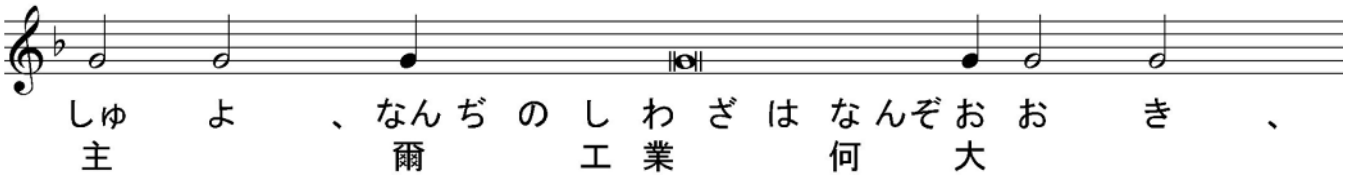
誦經） 爾の神にも、

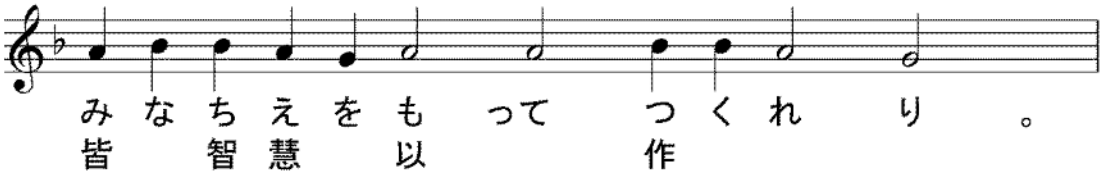
司祭） 睿智、

誦經） プロキメン、主よ、爾の工業は何ぞ多き、皆智慧を以て作れり、

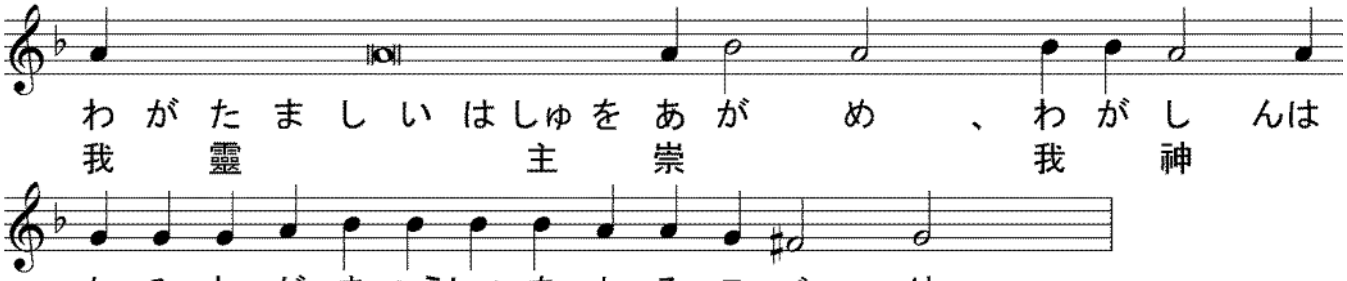


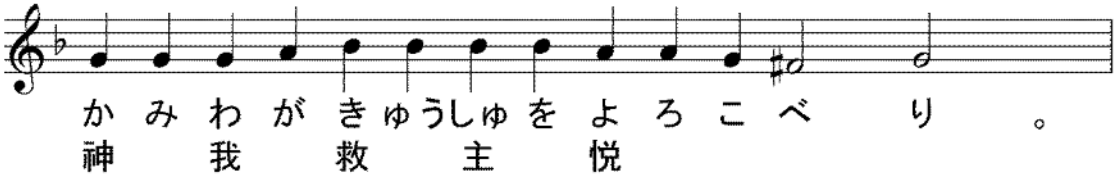
誦經） 我が靈よ、主を讃め揚げよ、主我が神よ、爾は至りて大なり、





誦經）我が霊は主を崇め、我が神は神我が救主を悦べり。





【 使徒経（アポストロス） 166端 コリンフ前書16章13～24節 】

司祭）睿智、

誦經）聖使徒パヴェルがコリンフ人に達する前書の讀、

司祭）謹みて聽くべし、

誦經）兄弟よ、爾等儆醒せよ、信に立て、勇め、堅固なれ。凡の事愛を以て行え。兄弟よ、ステファンの家はアハイヤの初實にして、且己を聖徒に務むることに獻げしは、爾等の知る所なり、我爾等に求む、爾等も此くの如き者、及び凡そ助力する者と、勤勞する者とに服せよ。我はステファン、フォルトゥナト、及びアハイクの來りしを喜ぶ、彼等は我が爲に爾等の缺くる所を補えり、蓋彼等は我と爾等との心を安んじたり。此くの如き者を敬え。アシヤの諸教會は爾等の安を問う。アキラ及びプリスキラは、其家の教會と偕に、主に在りて切に爾等の安を問う。衆兄弟爾等の安を問う。爾等聖なる接吻を以て互に安を問え。我パヴェル手づから爾等の安を問う。主イイスス ハリストスを愛せざる者は「アナフェマ」たるべし、「マラン、アファ」。願わくは我等の主イイスス ハリストスの恩寵は爾等と偕に在らんことを。我が愛もハリストス イイススに於て爾等衆人と偕に在るなり、「アミン」。

＊＊

（比較用　口語訳）

目をさましていなさい。信仰に立ちなさい。男らしく、強くあってほしい。いっさいのことを、愛をもって行いなさい。兄弟たちよ。あなたがたに勧める。あなたがたが知っているように、ステパナの家はアカヤの初穂であって、彼らは身をもって聖徒に奉仕してくれた。どうか、このような人々と、またすべて彼らと共に働き共に労する人々とに、従ってほしい。わたしは、ステパナとポルトナトとアカイコとがきてくれたのを喜んでいる。彼らはあなたがたの足りない所を満たし、わたしの心とあなたがたの心とを、安らかにしてくれた。こうした人々は、重んじなければならない。アジヤの諸教会から、あなたがたによろしく。アクラとプリスカとその家の教会から、主にあって心からよろしく。すべての兄弟たちから、よろしく。あなたがたも互に、きよい接吻をもってあいさつをかわしなさい。ここでパウロが、手ずからあいさつをしるす。もし主を愛さない者があれば、のろわれよ。マラナ・タ（われらの主よ、きたりませ)。主イエスの恵みが、あなたがたと共にあるように。わたしの愛が、キリスト・イエスにあって、あなたがた一同と共にあるように。

＊＊

【 使徒経（アポストロス） 240端 フィリピ書2章5節～11節 】

誦經）兄弟（けいてい）よ、爾等（なんぢら）はハリストス イイススの意（こころ）を以（もつ）て意（こころ）とすべし。彼（かれ）は神（かみ）の像（かたち）にして、神（かみ）と匹（ひと）しくなることを僭（ひとごろ）うとせざりき、然（しか）れども己（おのれ）を虚（むな）しくして、僕（ぼく）の貌（かたち）を受（う）け、人（ひと）と同（おな）じき者（もの）と爲（な）りて、外形（がいけい）に於（おい）て人（ひと）の如（ごと）くなり、己（おのれ）を卑（ひく）くして、死（し）に至（いた）るまで順（したが）い、且（かつ）十字架（じゅうじか）の死（し）に至（いた）れり。故（ゆえ）に神（かみ）も彼（かれ）を無上（むじょう）に高（たか）くして、彼（かれ）に凡（およそ）の名（な）に超（こ）ゆる名（な）を賜（たま）えり、凡（およ）そ天（てん）に在（あ）り、地（ち）に在（あ）り、及（およ）び地（ち）の下（した）に在（あ）る者（もの）の膝（ひざ）は、イイススの名（な）の前（まえ）に屈（かが）み、且（かつ）凡（およそ）の舌（した）はイイスス ハリストスが主（しゅ）たるを承（う）け認（みと）めて、光榮（こうえい）を神父（かみちち）に歸（き）せん爲（ため）なり。

＊＊

（比較用　口語訳）キリスト・イエスにあっていだいているのと同じ思いを、あなたがたの間でも互に生かしなさい。キリストは、神のかたちであられたが、神と等しくあることを固守すべき事とは思わず、 かえって、おのれをむなしうして僕のかたちをとり、人間の姿になられた。その有様は人と異ならず、おのれを低くして、死に至るまで、しかも十字架の死に至るまで従順であられた。それゆえに、神は彼を高く引き上げ、すべての名にまさる名を彼に賜わった。それは、イエスの御名によって、天上のもの、地上のもの、地下のものなど、あらゆるものがひざをかがめ、 また、あらゆる舌が、「イエス・キリストは主である」と告白して、栄光を父なる神に帰するためである。

＊＊

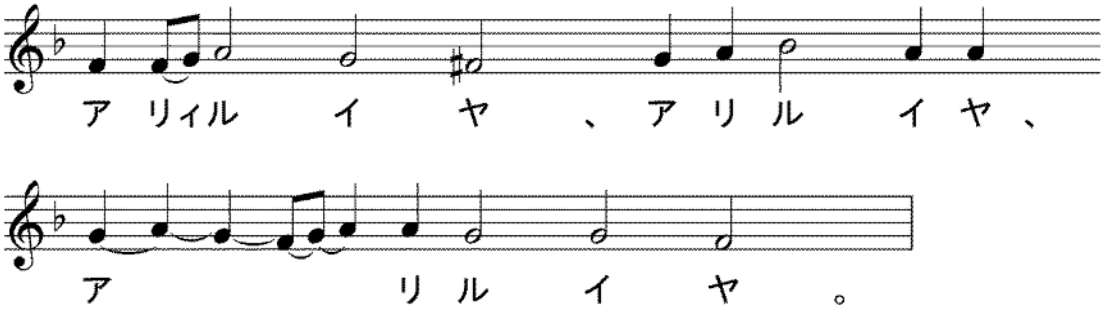
【 アリルイヤ　主日第４調　及び生神女誕生祭の　第８調 】

司祭）爾（なんぢ）に平安（へいあん）、

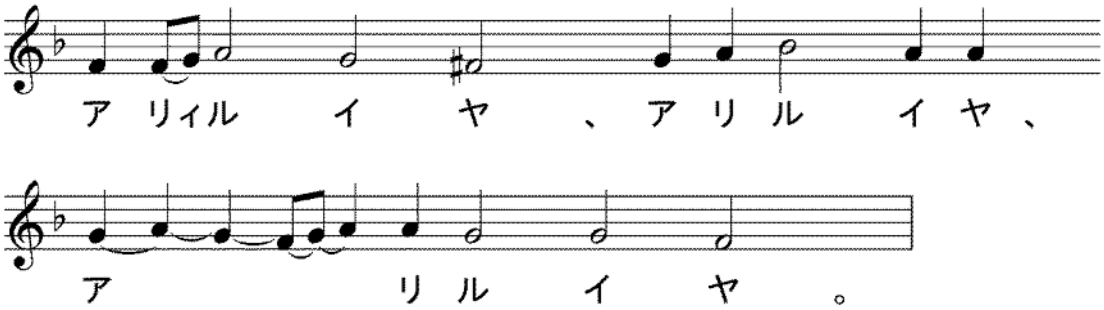
誦經）爾（なんぢ）の神（しん）にも、

司祭）睿智（えいち）、

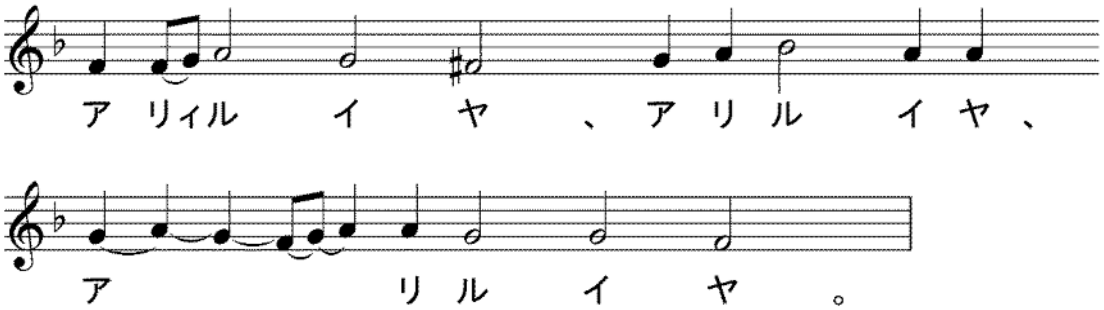
誦經) アリルイヤ、神よ、爾の寶座は世世に在り、爾の國の權柄は正直の權柄なり、



誦經) 爾は義を愛し、不法を惡めり、



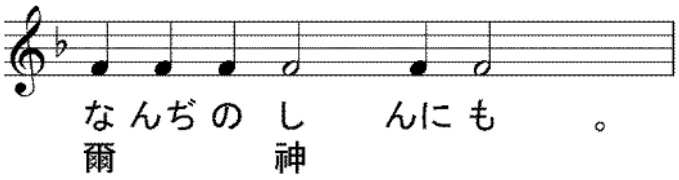
誦經) 主よ、爾及び爾が能力の匱は爾が安息の所に立てよ、



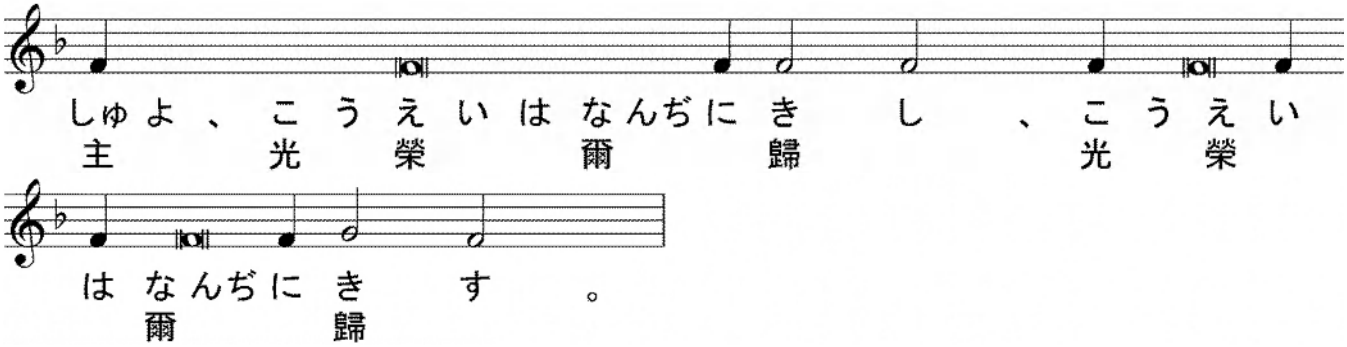
司祭) (黙誦: 人を愛する主宰よ、我が心に神を知る智慧の浄き光を輝かし、我が思念の目を啓きて、爾が福音の教を悟らしめ給え、我が衷に爾の福たる誡を畏るる畏をも入れて、我等が悉くの肉體の慾を踏み、凡そ爾の喜ぶ所を思い且つ行いて、屬神の生活を過ぐるを致させ給え、蓋ハリストス神よ、爾は我が靈と體との光照なり、我等爾と爾の無原の父と至聖至善にして生命を施す爾の神とに光榮を獻ず、今も何時も世世に、アミン。)

【 福音經 マトフェイ福音書87端 21章33〜42節 】

司祭) 睿智、肅みて立て聖福音經を聽くべし、衆人に平安、



司祭）マトフェイ傳の聖福音經の讀、



司祭）謹みて聽くべし、主は左の譬を設けて曰えり、家主あり、葡萄園を植え、之に籬を環らし、其中に酒榨を掘り、塔を建て、之を園丁に託して、他方に往けり。果斯近づきたれば、彼は其果を收めん爲に、諸僕を園丁に遣ししに、園丁は其僕を執えて、或者を扑ち、或者を殺し、或者を石にて擊てり。復他の僕を先より多く遣ししに、之にも是くの如く行えり。遂に己の子を彼等に遣して曰えり、我が子に愧ぢんと。然れども、園丁子を見て、相語りて曰えり、此れ嗣子なり、往きて、彼を殺して、其嗣業を取らん。乃彼を執えて、葡萄園の外に曳き出だして殺せり。然らば葡萄園の主來らん時、何をか此の園丁に行わん。彼等曰く、此の惡しき者を情なく滅し、葡萄園を以て他の園丁、即時に及びて彼に果を收めん者に託せん。イイスス彼等に謂う、爾等は聖書に、工師が棄てたる石は屋隅の首石と爲れり、此れ主の爲す所にして、我等の目に奇異なりとすと、云うを未だ嘗て讀まざりしか。

＊＊

（比較用　口語訳）

ある所に、ひとりの家の主人がいたが、ぶどう園を造り、かきをめぐらし、その中に酒ぶねの穴を掘り、やぐらを立て、それを農夫たちに貸して、旅に出かけた。収穫の季節がきたので、その分け前を受け取ろうとして、僕たちを農夫のところへ送った。すると、農夫たちは、その僕たちをつかまえて、ひとりを袋だたきにし、ひとりを殺し、もうひとりを石で打ち殺した。また別に、前よりも多くの僕たちを送ったが、彼らをも同じようにあしらった。しかし、最後に、わたしの子は敬ってくれるだろうと思って、主人はその子を彼らの所につかわした。すると農夫たちは、その子を見て互に言った、『あれはあと取りだ。さあ、これを殺して、その財産を手に入れよう』。そして彼をつかまえて、ぶどう園の外に引

き出して殺した。このぶどう園の主人が帰ってきたら、この農夫たちをどうするだろうか」。彼らはイエスに言った、「悪人どもを、皆殺しにして、季節ごとに収穫を納めるほかの農夫たちに、そのぶどう園を貸し与えるでしょう」。イエスは彼らに言われた、「あなたがたは、聖書でまだ読んだことがないのか、『家造りらの捨てた石が隅のかしら石になった。これは主がなされたことで、わたしたちの目には不思議に見える』。

＊＊

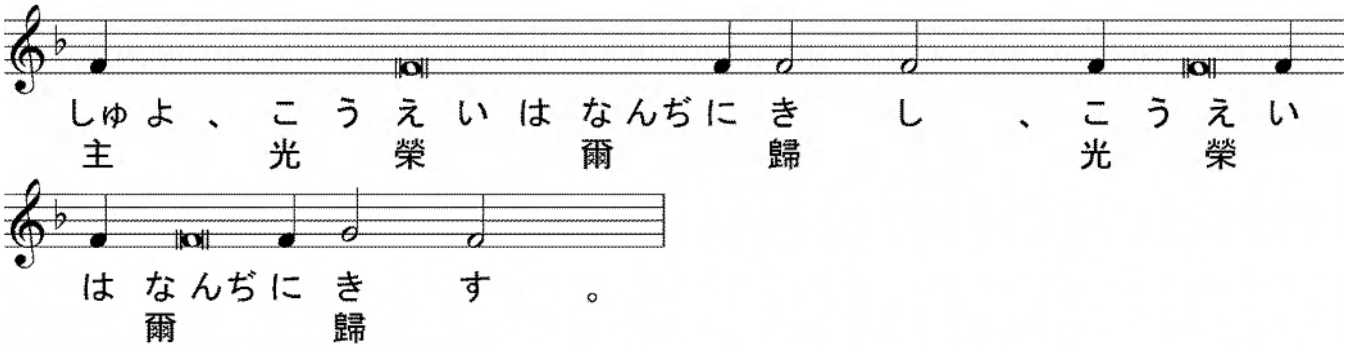
【　福音経（エヴァンゲリオン）　ルカ福音書54端　10章38～42節、11章27～28節　】

司祭）彼の時、彼等が行ける時、イイスス一の村に入りしに、或婦マルファと名づくる者、彼を其家に迎えたり。其姉妹にマリヤと名づくる者あり、イイススの足下に坐して、其言を聽けり。マルファは供事の多きに因りて心を煩わし、就きて曰えり、主よ、我が姉妹、我一人を遺して供事せしむるを爾意と爲さざるか、之に命じて、我を助けしめよ。イイスス彼に答えて曰えり、マルファよ、マルファよ、爾は多くの事を慮りて心を勞せり、然れども需むる所は一のみ。マリヤは善き分を擇びたり、是は彼より奪う可からず。此を言う時、一の婦民の中より聲を揚げて、彼に謂えり、爾を孕みし腹と爾が哺いし乳とは福なり。彼は曰えり、然り、神の言を聽きて之を守る者は福なり。

＊＊

（比較用　口語訳）イエスがある村へはいられた。するとマルタという名の女がイエスを家に迎え入れた。この女にマリヤという妹がいたが、主の足もとにすわって、御言に聞き入っていた。ところが、マルタは接待のことで忙がしくて心をとりみだし、イエスのところにきて言った、「主よ、妹がわたしだけに接待をさせているのを、なんともお思いになりませんか。わたしの手伝いをするように妹におっしゃってください」。主は答えて言われた、「マルタよ、マルタよ、あなたは多くのことに心を配って思いわずらっている。しかし、無くてならぬものは多くはない。いや、一つだけである。マリヤはその良い方を選んだのだ。そしてそれは、彼女から取り去ってはならないものである」。イエスがこう話しておられるとき、群衆の中からひとりの女が声を張りあげて言った、「あなたを宿した胎、あなたが吸われた乳房は、なんとめぐまれていることでしょう」。しかしイエスは言われた、「いや、めぐまれているのは、むしろ、神の言を聞いてそれを守る人たちである」。

＊＊



※聖体礼儀③（金ロイォアン聖体礼儀）へ